

当科にて外科的治療を行なった膝窩動脈瘤12例の検討

慶應義塾大学 外科

林 応典 (はやし まさのり ; 30才)

尾原 秀明, 松原 健太郎, 林 啓太, 神谷 悠紀, 北川 雄光

【はじめに】膝窩動脈瘤(PAA)は、瘤径が小さくても破裂や血栓閉塞を起こし下肢虚血の原因となりうる。当科で12肢のPAAに対する外科的治療を経験したので報告する。

【対象と方法】2008年3月から2017年8月の間に、当科で外科的治療を行なったPAA患者11例12肢を対象とし、後方視的に検討した。

【結果】全11例のうちわけは男性8例、女性3例であり、うち男性1例が両側PAAを治療した。平均年齢66歳、瘤径中央値32.5mm(21-90mm)であった。症候性PAAは10肢であり、急性動脈閉塞(安静時痛)7肢、破裂1肢、その他2肢であった。術式はバイパス術7肢、瘤縫縮1肢、間置術1肢、大腿切断1肢であった。一方、無症候性PAAの2肢は間置術とバイパス術を施行した。全例において術後合併症なく経過し、観察期間中にグラフト閉塞や四肢切断を認めていない。

【結語】PAAの術後成績は良好であった。PAAは瘤径が小さくとも急性下肢虚血を起こすリスクがあるため、積極的な外科的治療も考慮される。